

母校と歩む教員生活の一步

2015/3/25

多くの実りある機会に恵まれ、また、多くの方々に支えていただき、ここまで歩いてこられた。2014年度から母校の明治高校で働かせていただくだけでなく、明大教育会事務局員の一員にも加えていただくこととなった。自分が学んできた学校やここまで導いてくださった方々への恩返しのあることをありがたく思う。

2014年4月から教壇に立ち、早くも一年が経った。普段の学校生活における生徒諸君との関わりを通して、教員としての楽しみを覚えたと同時に、その大変重要な役目と自分の至らなさを痛感した。以下に、初年度の教員生活の一端を記したい。

決して忘れることができないのは入学式である。高校一年の学級担任としてこれから一年間を共にする生徒と対面した。少し大きめの制服を着て、緊張した面持ちで式に臨む新入生の横で、私も緊張と懐かしさの入り交じった不思議な気持ちを味わっていた。不安で強張った表情をしている一人の男子生徒に声をかけようという感情がわき起ったのは、数年前に旧校舎の一室で不安に押し潰されそうだった自分と重なるものがあったからだ。「教員であり、この学校のOBでもある」という自分の立場をぜひ生徒の自立と日々の生活の為に活かしていきたいと強く思った瞬間だった。

自分が受け持ったクラスの生徒には特に思い入れがあった。生徒が大人になって明治高校の生活を振り返った時、「あのクラスでよかった」、「思えばクラス活動の中で学んだことがあったな」と思えるような生活空間を築いていきたいという一念で、日々の活動の記録である学級通信「うちだより」を年間で計80号発行した。また、読書の楽しさを味わってもらうために書評合戦を企画した。各取り組みの反応は生徒によって様々だが、十年後の生徒の心に何か一つでも響いていればいいと思う。

担当する古典の授業では、単純に話の内容を板書して単元を終わりにするのではなく、そこから一步踏み込んで、生徒指導の観点や自分で考える機会を加えたまとめにこだわった。例えば、一つの古典作品を他者の気持ちを考えるきっかけにしたり、作品に底流する理念や思想がどのように個々の章段に関連するかを紹介したりした。また、試験後には生徒にアンケートをとり、補助資料としてのパワーポイントの活用や小テストの改善等につなげた。

ここまで、基礎的な文法を指導しながら古典作品の魅力伝える授業を形成することの難しさと奥深さを痛感する日々だ。「学び続ける姿勢」が求められる教員として当然のことだが、日々の業務と並行して自分の知識・技能の向上にも根気強く努めていかなければいけない。そして、一カ所にとどまり、決して自分に楽をさせてはいけない、と強く感じる。そんな思いもあって、明治大学の教育会で教員養成に携わりつつ、学生の意欲的に学ぶ姿から刺激を受けることで、自分自身も成長していこうと決意したのだ。

事務局では、これまで総会の受付や議事録の作成等の仕事をさせていただいた。また、分

科会や懇親会では、明治大学出身である現職の先生方の授業実践などをお聞きすることもできた。このように、母校においてお世話になった先生方と仕事をさせていただくことで、学生時代に抱いていた思いの原点に立ち返ることができた。今、教職課程を履修する学生の皆さんも、各学校で教員として生徒の成長に関わるようになった時、母校の存在と人々の結束が心の拠り所となり、モチベーションに結びつくはずだ。

学生の皆さんが、同じ志を持つ明大教育会事務局に加わることで、鼓舞し合いながら教育に力を注ぐ仲間のネットワークが拡大し、明治大学を中心とした情熱あふれる教育が全国各地に波及していくことを願う。

日々、先輩教員の皆様や生徒に助けられ、それがモチベーションとなって、この一年を過ごすことができた。この気持ちと経験を決して忘れることなく、これからも日々邁進していく所存だ。最後に、教育会事務局や明治高校の先生方をはじめ、応援し支えてくださった多くの方々に感謝を申し上げ、筆を擱くこととしたい。